

セメント樽の中の手紙

世に嘉樹



# セメント樽の中の手紙



藍岩堂



松戸与三はセメントあけをやっていた。外の部分は大きく目立たなかったけれど、頭の毛と、鼻の下は、セメントで灰色に蔽おおわれていた。彼は鼻の穴に指を突っ込んで、鉄筋コンクリートのように、鼻毛をしゃちこぼらせている、コンクリートを除りたかったのだが一分間に十才ずつ吐き出す、コンクリートミキサーに、間に合わせるためには、とても指を鼻の穴に持って行く間はなかった。

彼は鼻の穴を気にしながら 遂々とうとう 十一時間、——その間に昼飯と三時休みと二度だけ休みがあったんだが、昼の時は腹すの空いてるために、も一つはミキサーを掃除していて暇がなかったため、遂々とうとう 鼻にまで手が届かなかった——の間、鼻を掃除せつこうしなかった。彼の鼻は石膏細工の鼻のように硬化したようだった。

彼が仕舞時分に、へトへトになった手で移した、セメントの樽たるから小さな木の箱が出た。「何だろう？」と彼はちょっと不審に思ったが、そんなものに構って居られなかった。彼はシャベルで、セメントます 桤はかにセメントを量り込んだ。そして桤から舟へセメントを空けると又すぐその樽を空けにかかった。

「だが待てよ。セメント樽から箱が出るって法はねえぞ」

彼は小箱を拾って、腹かけの 井どんぶりの中へ投り込んだ。箱は軽かった。「軽い処を見ると、金も入っていねえようだな」彼は、考える間もなく次の樽を空け、次の桤を量らねばならなかった。

ミキサーはやがて空廻りからまわを始めた。コンクリがすんで終業時間になった。

彼は、ミキサーに引いてあるゴムホースの水で、一と先ず顔や手を洗った。そして弁当箱を首に巻きつけて、一杯飲んで食うことを専門に考えながら、彼の長屋へ帰って行った。発電所は八分通り出来上っていた。夕暗に聳える恵那山は真っ白に雪を被っていた。汗ばんだ体は、急に凍えるように冷たさを感じ始めた。彼の通る足下では木曾川の水が白く泡を嚙んで、吠えていた。

「チェッ！ やり切れねえなあ、嬢かかあは又腹を膨らふくかしやがったし、……」彼はウヨウヨしている子供のことや、又此寒さを目掛けて産れる子供のことや、滅茶苦茶に産む嬢の事を考えると、全くがっかりしてしまった。

「一元九十銭の日当の中から、日に、五十銭の米を二升食われて、九十銭で着たり、住んだり、籠棒奴べらぼうめ！ どうして飲めるんだい！」

が、フト彼は井の中にある小箱の事を思い出した。彼は箱についてのセメントを、ズボンの尻でこすった。

箱には何にも書いてなかった。そのくせ、頑丈がんじょうに釘づけしてあった。「思わせ振りしやがらあ、釘づけなんぞにしやがって」

彼は石の上へ箱を打ぶつ付けた。が、壊われなかったので、此の世の中でも踏みつづす気になって、自棄やけに踏みつけた。

彼が拾った小箱の中からは、ボロに包んだ紙切れが出た。それにはこう書いてあった。

——私はNセメント会社の、セメント袋を縫う女工です。私の恋人は 破砕器クラッシャーへ石を入れることを仕事にしていました。そして十月の七日の朝、大きな石を入れる時に、その石と一緒に、クラッシャーの中へ嵌はまりました。

仲間の人たちは、助け出そうとしましたけれど、水の中へ溺おぼれるように、石の下へ私の恋人は

沈んで行きました。そして、石と恋人の体とは砕け合って、赤い細い石になって、ベルトの上へ  
落ちました。ベルトは<sup>ふんさいとう</sup>粉砕筒へ入って行きました。そこで鋼鉄の弾丸と一緒に<sup>こまか</sup>細く  
<sup>のろい</sup>細く、はげしい音に呪いの声を叫びながら、砕かれました。そうして焼かれて、立派にセメント  
となりました。

骨も、肉も、魂も、粉々になりました。私の恋人の一切はセメントになってしまいました。残  
ったものはこの仕事着のボ口<sup>ばか</sup>許りです。私は恋人を入れる袋を縫っています。

私の恋人はセメントになりました。私はその次の日、この手紙を書いて此樽の中へ、そうと仕  
舞い込みました。

あなたは労働者ですか、あなたが労働者だったら、私を可哀相だと思って、お返事下さい。  
此樽の中のセメントは何に使われましたでしょうか、私はそれが知りとう御座います。  
私の恋人は幾樽のセメントになったのでしょうか、そしてどんなに方々へ使われるのでしょうか  
。あなたは左官屋さんですか、それとも建築屋さんですか。

私は私の恋人が、劇場の廊下になったり、大きな邸宅の塀になったりするのを見るに忍びま  
せん。ですけれどそれをどうして私に止めることができますよう！あなたが、若し労働者だっ  
たら、此セメントを、そんな処に使わないで下さい。

いいえ、ようございます、どんな処にでも使って下さい。私の恋人は、どんな処に埋められ  
ても、その処々によってきっといい事をします。構いませんわ、あの人は<sup>きしやう</sup>氣象<sup>しつ</sup>の確かりした人  
ですから、きっとそれ相当な働きをしますわ。

あの人は<sup>やさ</sup>優しい、いい人でしたわ。そして確かりした男らしい人でしたわ。未だ若うございま  
した。二十六になった許り<sup>ばか</sup>でした。あの人はどんなに私を可愛がって呉れたか知れませんでした  
。それだのに、私はあの人に<sup>きやうかたびら</sup>経帷布を着せる代りに、セメント袋を着せているのですわ！あ  
の人は<sup>かん</sup>棺に入らないで<sup>かいてんがま</sup>回転窯の中へ入ってしまいましたわ。

私はどうして、あの人を送って行きましょう。あの方は西へも東へも、遠くにも近くにも<sup>ほうむ</sup>葬  
られているのですもの。

あなたが、若し労働者だったら、私にお返事下さいね。その代り、私の恋人の着ていた仕事着  
の裂を、あなたに上げます。この手紙を包んであるのがそうなのですよ。この裂には石の粉と、  
あの方の汗とが<sup>し</sup>浸み込んでいるのですよ。あの方が、この裂の仕事着で、どんなに固く私を抱い  
て呉れたことでしょう。

お願いですからね。此セメントを使った月日と、それから委しい所書と、どんな場所へ使った  
かと、それにあなたのお名前も、御迷惑でなかったら、是非々々お知らせ下さいね。あなたも御  
用心なさいませ。さようなら。

松戸与三は、<sup>わ</sup>湧きかえるような、子供たちの騒ぎを身の廻りに覚えた。

彼は手紙の終りにある住所と名前を見ながら、茶碗に注いであった酒をぐっと一息に<sup>あお</sup>呻った。

「へべれけに酔っ払ってえなあ。そうして何もかも<sup>ぶ</sup>打ち壊して見てえなあ」と怒鳴った。

「へべれけになって<sup>あば</sup>暴れられて<sup>たま</sup>堪るもんですか、子供たちをどうします」

細君がそう云った。

彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。

(大正十五年一月)



セメント樽の中の手紙

平成二十三年二月三日 二版

著者 葉山 嘉樹

発行所 藍岩堂